

北朝鮮の山奥にある「強制収容所」をなくすため、多くの人びとに呼びかけています。

nf-staff@netlive.ne.jp

NO FENCE

<http://nofence.netlive.ne.jp>

新年号

VOL. **27**

2014年1月

〒102-0093 千代田区平河町 1-5-7-203 TEL&FAX 03-3262-7473 【郵便振替口座】NO FENCE / 00180-1-707147



INDEX

✓張成沢(氏) 処刑に関する NO FENCE 声明 1
概括的分析のみでは済まされない・砂川昌順 2
ドイツ制作映画「CAMP14」を観て—12.14 NO FENCE 集会報告—・小川晴久	... 4
化成 16 号管理所の元警備員からの証言・李恩元 7
申東赫氏の本が 24 か国語になった!・小川晴久 8

張成沢(氏) 処刑に関する NO FENCE 声明

去る 12 月 12 日北朝鮮で張成沢(氏)が、国家保衛部軍事裁判の上、即刻処刑された。「犬よりも劣る」「裏切り者」と北朝鮮当局は報じたが、1%でも領袖に疑義を持つものは処断するという理由付けをみると、唯一思想体系を少したりとも崩そうとする者たちに対する粛清であることは明らかである。三代目金正恩の恐怖政治の明白な証明なのである。

北朝鮮の強制収容所の廃絶を目指す NO FENCE の立場からこの粛清を見たとき、「張成沢一党」と名指しされた人々が、数千から数万の単位で強制収容所に送られ、犠牲になる危険性がある。公開裁判もなしに、連座制で。

北朝鮮は 1981 年 9 月に世界人権宣言を具体化した「市民的政治的権利に関する国際規約」に加入している。しかしそれを国内に周知することは一切せず、全く遵守してこなかった。代わりに反革命分子は人間のクズであり、三代に渡ってその種を絶やせ(金日成教示)に従い、公開裁判もなしに、血縁連座制で家族を含め強制収容所に送り、恐怖政治を敷いてきた。

複数の体験者の手記(証言)と人工衛星写真でその存在が明白であるにも拘わらず、北朝鮮当局は一貫してその存在を否定している。その存在と実態が知られたら、金日成の威信が崩れると息子金正日が恐れたほどひどい場所であるからである。

12 月 18 日国連総会は連続 9 回目の北朝鮮人権状況改善決議を採択し、また同日北朝鮮人権状況特別報告者ダルスマン氏は、ジュネーブで声明を発表して、連座

制による迫害の危険性を警告した。国際社会は強制収容所を活用するこのような迫害を阻止せねばならない。2005年10月に国連総会で採択された“保護する責任”(Responsibility to Protect)を国際社会は果たさなければならない。北朝鮮の強制収容所内外の人々の人権と生命を“保護する責任”である。

そのためには北朝鮮の強制収容所の実態を知ること、その基礎知識が不可欠である。またこの新しいドクトリンを知ること。マスメディアは、北朝鮮の強制収容所の存在とその機能、そしてこの新しいドクトリンの存在を国内外に広く知らせる責任がある。それは、北朝鮮当局による人権侵害問題を国民に啓発する責務を国や自治体に課した、2006年に制定された日本版北朝鮮人権法の実践でもあるからである。

以上の事を NO FENCE は広く訴える。

2013年12月21日 **NO FENCE**

『概括的分析のみでは済まされない』

代表 砂川昌順 

金正恩は大きな過ちを犯した。張成沢を国家転覆陰謀の罪を犯したとして、刑法を盾に処刑を断行した。粛清と称する大量処刑をともなう恐怖政治により、権力基盤の強化策を進めている。猜疑心は増幅し殺戮を生み恐怖となる。その恐怖は、本意の忠誠心ではなく脅えを生む。金正恩の、取り巻きたちへの猜疑心が止むことはない。金正恩は逆に粛清の副作用に怯え、意に沿わない者たちを強制収容所に送り、あるいは虐殺を重ねることになる。

張成沢は権力を纏うことに失敗した。敗者の即時処刑は、歴史において珍しくはない。かつて、軍事クーデターが頻発するアフリカの某国に在勤していた頃、クーデターに失敗した将校や兵士たちが秘密裏に処刑される現場を目の当たりにしたことがある。首謀者や関与した者たちが、クーデター直後の夜明け前の砂浜に引きずり出され、一斉射撃により銃殺された。

クーデターを鎮圧した政権側の司令官もクーデターに失敗した首謀者や将校たちも、かつては軍部の同僚や政権側の重鎮であった。どちらも、わたしの知人であった。だが、政権争いは食うか食われるか。そこに人権や人道の入り込む余地などない。昨日の友は今日の敵ともなる。勝てば官軍となり、自身を正当化できうる権力

を得ることになる。処刑後、政権側の司令官にその不当性を問いただした。しかし司令官は、政権側の正当性を主張するのみであった。同政権もまた、クーデターによって樹立したことには一言も触れずにである。

正当化は一方的な主張の裏返しであり、得てして欺瞞が潜んでいる。国際社会に対して正当性を主張し続けるには、欺瞞を隠蔽するのが常套手法である。特に独裁国家においてはそうである。

金正日は、北朝鮮は国際社会との国民の自由な接触を禁じ、極端な情報統制を敷き国民を欺瞞した。保身に長けた残虐な独裁者であった。自身の犯罪を隠し、罪を他人に被せた。自国において人権は擁護され人道は重んじられていると嘯き、国際社会に対して人権蹂躪の事実や反人道的犯罪行為を隠蔽した。国連等による客観的な調査を拒絶し、国際社会と協調することなく、いかなる疑義に対しても持論によって終止符を打たんとし続けた。自由社会の情報を遮断し統制することで、相互監視密告社会を恐怖により維持しえた。政権中枢や側近に、秘匿能力に長けた巧みな参謀が仕えていたやもしれぬ。一方、金正恩体制ではどうか。

前2代の独裁統治形態を模倣し虚勢を張る金正恩の体制立ち上げは、稚拙ながらも順調のように見えた。身内で身边を固め、金ファミリーの盤石さを内外に示そうとした。だが、ここにきて誤算が生じた。側近者たちが、稚拙な模倣を見透かし絶対的とされた権力に忠誠を示さなくなってきた。張成沢の不遜な態度も目立ってきた。そこで金正恩は、この動きに猜疑心と不安感を募らせ反逆者とのレッテルを貼り処刑することで、側近者や自国民に恐怖心を植え付け体制固めに利用しようとした。だが、その策略は国際社会では裏目に出た。

国内的には、恐怖による統治形態は短期的効果性を有する。だが、長期的には国民に不安や不満が募って支持を失い、政権は崩壊の一途をたどる。対外的には、即時銃殺という事実が国際社会に知れ渡ったことで、人権人道の面からも非難を浴びている。金正恩は、独裁者が国際社会に秘匿すべき残虐性を、愚かにも絶対独裁体制確立の材料と見誤り秘匿せずに公表した。側近に知恵者がいないことを露呈した。

自国の法律を盾として、人道に対する罪から逃れることはできない。独裁者金正恩の残虐性を立証するためのロードマップを、参謀の虐殺によって自らの手で描き始めている。だが、上述のような概括的分析のみでは済まされない。視点を増やし分析を深める視座力が求められる。事態は深刻である。恐怖政治は平和が続くと支持を失うからである。その支持を得るために、さらに多くの血が流れることは想像に難くない。国際社会は、金正恩政権の非道性、体制内部に潜む危険性の高まりを見逃してはならない。

ドイツ制作映画「CAMP14」を観て

—12.14 NO FENCE 集会報告—

副代表 小川晴久 

年末の北朝鮮人権問題啓発週間の NO FENCE 集会は、12月14日(土)午後1時から4時半まで浜松町の人権ライブラリーで挙行された。二部構成で第一部は一昨年ドイツで制作された、申東赫氏の体験を描いたドキュメンタリー映画「CAMP14—TOTAL CONTROL ZONE」(104分)の上映、第二部は北朝鮮強制収容所問題をめぐってのトークライブであった。出席者は30数名。本邦初上映とあって、半数近くが新しい顔ぶれの人々であった。

第一部「北朝鮮社会は天国であった」

この映画は价川第14号収容所で生まれ、24歳でそこを脱出した申東赫氏と、14号とは限らないが収容所を管理した二人の元保衛員の証言から成り立っている。収容所内部の映像は皆無に等しいので、収容所内部の公開処刑はスケッチ風の絵と動画で描かれる。収容所で生まれ23年間苦吟した体験者と収容所で収容者を虫けらのように扱うよう教育された二人の保衛員の証言は、すべて収容所に関するものばかりである。104分もの長きにわたるこのドキュメントは、北朝鮮の恐ろしい強制収容所の真実を活写している。印象に残り、メモしたものの中から何点か紹介しよう。

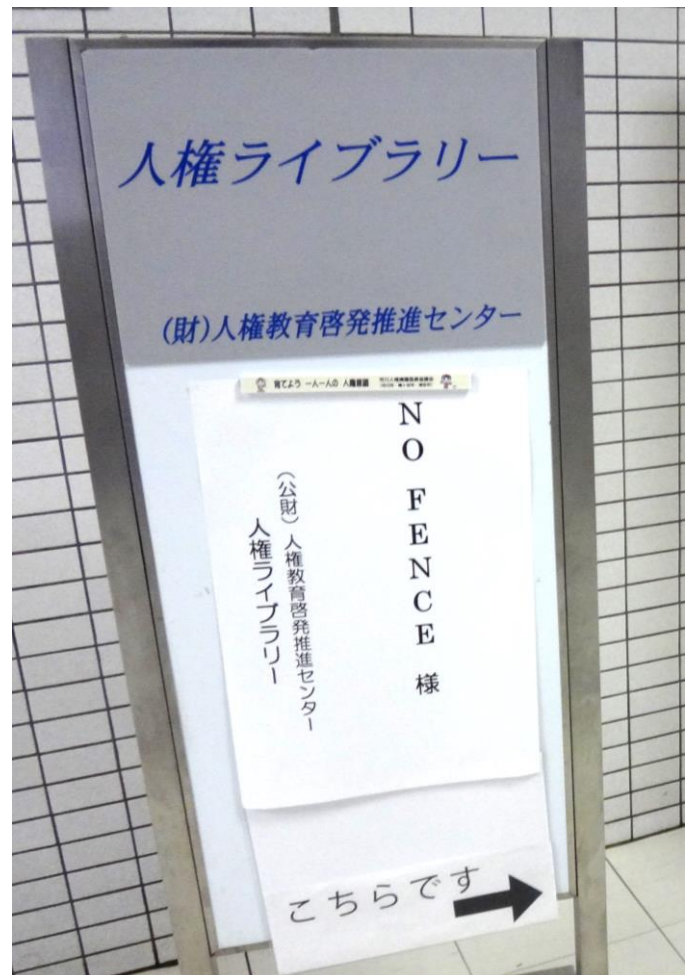
収容所内部の映像は皆無に等しいので、収容所内部の公開処刑はスケッチ風の絵と動画で描かれる。収容所で生まれ23年間苦吟した体験者と収容所で収容者を虫けらのように扱うよう教育された二人の保衛員の証言は、すべて収容所に関するものばかりである。104分もの長きにわたるこのドキュメントは、北朝鮮の恐ろしい強制収容所の真実を活写している。印象に残り、メモしたものの中から何点か紹介しよう。

元保衛員の証言から

「収容所では囚人同士で殺させる。自分の手を汚したくないから。」

「囚人は反革命分子で人間のクズだと教えられた。彼らの生命は八工の命程しかない。彼らは殺さねばならない。そうするものと教わっていたから、そうしただけ。」

「今はとても後悔している。彼らも人間、私も人間。こういうインタビューはや



りたくない。褒められることは、なにもないから。」(以上、元保衛員 A)

申東赫氏の証言から

「平壤で生活し、海外にも旅行したという同房の人から聞いた鶏を丸焼きにして腹一杯食べた話から、明日死ぬのであれば、自分も外に出て、一度でいいからそうしてみたいと思った。一度でいい。腹一杯食べてみたい。それ以外はどうなってもいいと考えた。」(脱出の動機)

「逃げた翌日見た北朝鮮社会は、人々が自由に動いていた。警察官に咎められることなく。天国だと思った。」

「韓国は物質的には豊かな国であるが、自殺者も多い。お金のためである。」

「収容所では何一ついい思い出はない。しかし私の心は純粹であった。」

「今は腹一杯食べることは出来るが、私の心はいつも収容所の中にいる。」

「やがて収容所もなくなるだろうから、私はそこに帰り、そこにトウモロコシを植えて、それを食べて生きていきたい。」



申東赫氏の最後の言葉も、収容所で生まれ、23歳までそこで過ごした彼ならではのものではあったが、北朝鮮社会は天国であったという二番目の証言は、心底びっくりした。私は北朝鮮から脱出して中国社会を見た脱北者の感想として「中国は天国だ」という証言が頭にあったからである。食糧も不足し、移動の自由もなく、相互監視下にある北朝鮮社会が天国であるという彼の第一印象は、いかに収容所が苛酷な場所であるかを語って余りある。自由という感覚は相対的なものかもしれない。しかしその相対的な不自由の極致に北朝鮮の強制収容所があることを、申東赫氏のこの証言は雄弁に語っている。この証言を引き出し、記録しただけでも、このドキュメンタリー映画の存在価値がある。

この記録映画は、想像以上に良く出来ていた。3月から東京のユーロスペース、そのあと大阪、名古屋で一般上映されると聞くと、長く上映してほしいものである。それ以外の地でも。砂川代表は一枚の写真、一つの映像が欲しいと語られたことがある。この記録映画がその役割を果たすのではないかという予感がする。もう一度観たいと思わせる出来栄えなのである。12月14日の一回だけの集会上映がドイツの制作者から許された NO FENCE は、宋允復氏と細村嘉一氏の努力で独自に字幕入れを果たして、我々に感動を与えてくれた。たった一回(一日)だけの字幕が将来陽の目を見ることが出来ることを期待したい。



第二部 トークライブから

第二部は砂川代表の司会で、韓国の友誼団体「北韓政治犯収容所解体本部」(NK Gulag) から贈られた最近の強制収容所の鳥瞰図の披露と宋允復事務局長の解説を中心に進められた。最近のアムネスティー本部発表の報告書(12月1日)で、15号(ヨドック)も16号(化成)も収容所が拡張していると言っていることにも宋さんは触れた。また22号は解体されたとされているが、七十歳以上の老人はそこに残されていることも。17号管理所は1980年代に一旦解体されたとされていたが、1990年代末にテソンに再建され、18号管理所から2万人がそこに移されたという。従って韓国政府系の統一研究院の推定——4ヶ所、収容者総計8万~12万説は少なすぎる推定であることが、改めて明らかになった。従来通り6ヶ所15万~20万説を堅持して可である。

総じて12月14日のNO FENCE 集会は、CAMP 14の記録映画が予想以上にいい映画であったので、独自に日本語字幕を入れて本邦初上映をしたことは、大いに評価されてよい。参加者数は30数名であったが、この映画に期待して参加された方たちは満足して帰られたと思う。この映画の上映を企画した宋さん、字幕入れに尽力されたお二人に感謝して報告を閉じたい。

会員のみなさまへ

私たち「NO FENCE」は、北朝鮮の強制収容所をなくすためのアクションを展開するにあたって、会員のみなさまからの声を常にお待ちしています。

- ・北朝鮮強制収容所体験者の本を読んで感じたこと
- ・「NO FENCE」活動についての提言
- ・北朝鮮の強制収容所について日頃から思っていたこと

みなさまの心のこもった一言が北朝鮮の強制収容所をなくす原動力となります。

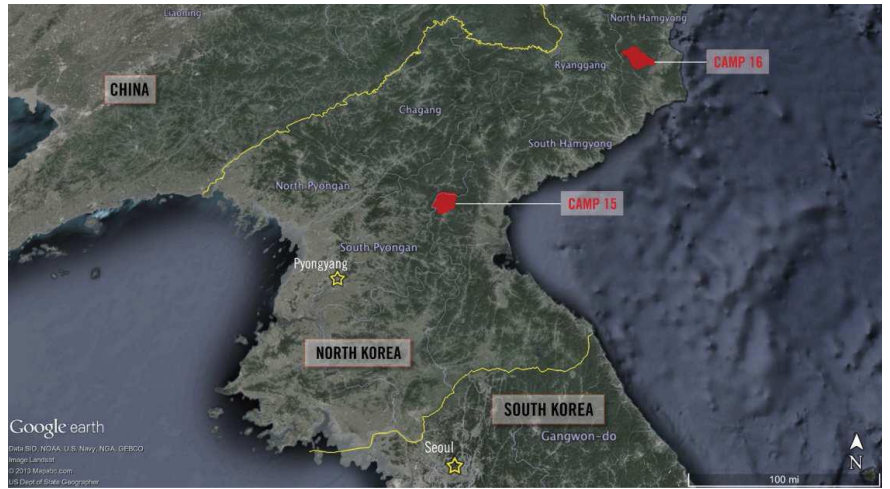


お問い合わせ(編集者) yi_ew@hotmail.com

化成 16 号管理所の元警備員からの証言

世話人 李恩元 

【関連資料紹介】2013年12月5日に公開されたアムネスティ・インターナショナルの報告書『朝鮮民主主義人民共和国：衛星写真が語る収容所の抑圧』（原題：North Korea: New satellite images show continued investment in the infrastructure of repression, ASA 24/010/2013）は、衛星画像を用いて北朝鮮の耀徳 15 号管理所及び化成 16 号管理所の最新状況を伝えている。



(C) Analysis secured by Amnesty International (C) DigitalGlobe 2013.

同報告書によれば、これらの収容所における「複数の新しい居住棟、生産設備の拡大、そしてひき続き厳格な治安体制が見てとれた」と言う。それに加えて、化成 16 号管理所の元警備員の証言を次のように紹介している。（一部抜粋）

1980年から1990年半ばまで16号管理所の警備員（security official）であったリ〇〇氏は、2013年11月に行われたアムネスティ・インターナショナルとのインタビューにおいて、彼自身が目撃した、その他の形態の処刑方法について述べた。それは、収容者たちに自分の墓を掘らせた後、ハンマーで彼らの首を殴り殺すことであったり、収容者たちの首を絞め、木製の棒で死ぬまで殴りつづけることであった。また、数人の女性収容者が役人たちに強姦された後、行方不明となったが、リ〇〇氏はこの女性たちは秘密裏に処刑されたのではないかと推測した。

残忍極まりないやり方である！

仮に「犯罪者」であるにせよ、彼らも人間であり、それゆえ人権を有する。このような証言を耳にしたら、人間なら誰もが、こみ上げてくる怒りと悲しみの気持ちを抱くであろうと思う。私たち NO FENCE も、北朝鮮の強制収容所に囚われている人々への——人種や性別、国籍の違いを超えた——こうした共感と同情の気持ちをさらに広めていかねばならない。それは、彼らを救うことでもあり、強制収容所をなくすことへとつながるであろう。

申東赫氏の本が 24 か国語になった！

副代表 小川晴久 

昨年4月まで Blaine Harden 著の申東赫氏の体験記『Escape from Camp14』の各国語訳の確認をしておきながら、その後の確認を怠っていた。8 か月経った先日 Blaine Harden 氏のホームページを開いてみたら、昨年末までに 24 か国語に訳されるという予告が実現しているではないか！近くスペイン語版（Kailas 出版社）とイタリー語版（Edizioni Codice 出版社）が出るという。昨年4月の時点では 13 か国語版が実現していた。8 か月で更に 11 か国語版が出来るか、私は内心疑問であったが、調べてみたら実現していたのである。ボランティア活動と商業ベースの違いを思い知らされた！広いスペイン語圏のスペイン語版も近く実現すると言うではないか。

申東赫氏が英語でスピーチ！

なお驚いたことがある。去る6月申東赫氏が、ジュネーヴに根拠を置く NGO, UN Watch から「人間の良心」賞を受賞していたことを遅まきながら知ったが、何と受賞スピーチを英語でやっていた！ペーパーを読み上げる3分位のスピーチで、発音は決してうまいとは言えないが、まあまあ出来栄であった。収容所で生まれ、23年もそこで過ごした彼が、2005年にそこを脱出して8年目。ソウルとアメリカを往き来する生活の中で、必要に迫られて徐々に親しんでいったのであろう。このスピーチのために特訓を行ったのかも知れない。ともかくこれは大ニュースである。

そこで私は去る12月14日の記録映画「CAMP14」を顧（かえりみ）て思った、今や申東赫は北朝鮮の恐ろしい強制収容所を世界に知らせるスターであると。1年位前か、ジュネーヴのある NGO の集会で彼が「一体いつまで私に同じことをしゃべらせるのか」と叫んだそうである。前記したようにブレイン・ハーデンさんのまとめた英語版の申東赫氏の体験記が 24 か国語まで訳されている。その上で、一昨年できたドイツ制作の彼の証言からなる「CAMP14」の出現である。申東赫氏はこの記録映画（104分）で一時間は画面に出ずっぱりである。インタビューに答える形で彼は静かにマイペースで話し続ける。彼は記録映画で訴え続けることになったのである。彼はもう辛い体験を語らなくていい。私たちはこの記録映画に感謝しなければならない。活字と映像で申東赫氏は北朝鮮の強制収容所が無くなる日まで訴え続ける。トウモロコシを自分の手で植え、自給自足したいという願いが実現する日まで。彼を活字と映像で訴え続けさせよう。このように辛い体験を証言してくれた彼に感謝しながら。